

愛知県美術館はこの秋、「生誕100年 ジャクソン・ポロック展」を開催します(11月11日 - 来年1月22日)。  
それに関連してお届けしているこの「ポロックの足跡を訪ねて」シリーズ、4回目となる今回はアリゾナです。



▲ アリゾナの荒野(2004年撮影)。この写真を撮影した時は残念ながら曇天でしたが、アリゾナは、晴天時には赤い大地と青い空のコントラストがとても美しいです。



▲ アリゾナの道路(2004年撮影)

ポロックは幼少期、アリゾナと深い縁がありました。1913年(1歳)から1917年(5歳)の間、アリゾナの州都フェニックスに住んでいましたし、1923年(11歳)から1924年(12歳)にかけてはフェニックス近郊に住んでいました。また1927年(15歳)には、グランド・キャニオン(アリゾナ州)のノース・リム(北側の縁)近辺の測量調査団に、兄サンフォードと一緒に参加しています。(のちにアルコール中毒になり、最後は飲酒運転による自動車事故で亡くなってしまいうポロックですが、酒を覚えたのはこの時でした。)



▲ 日没時のグランド・キャニオン(ノース・リム、2004年撮影)

1944年(32歳)、ポロックはある芸術雑誌の誌上アンケートに答えて、次のように言っています。「私は西部に対してははっきりした感覚を持っている。すなわち、その地の広大な水平性である」。ここでは「アリゾナ」とは明言されていませんが、ポロックが幼少期に転々とした西部のそれぞれの土地の特徴や、その時の彼の年齢などを考えると、そこで彼が言う「広大な水平性」の感覚は、アリゾナの体験と深く結びついているように思われます。また、グランド・キャニオンの圧倒的なスケール感も、後々のポロックの仕事に影響を及ぼしているのではないかとしばしば言われています。



▲ トント・ナショナル・モニュメント(アリゾナ州トント、2004年撮影)。中央の崖の凹み部分に先住民(サラド人)の住居跡があります。



▲ 上記の住居の内部(2004年撮影)。壁、窓、階段などの存在がはっきり確認できます。



▲ 先住民(ホホカム人)の球技場(プエブロ・グランデ博物館、アリゾナ州フェニックス、2004 年撮影)。ホホカムの球技がどんな種類やルールのものであったかは、残念ながら不明です。

アリゾナ州には、アメリカ先住民の遺跡が今もたくさん残っています。少年時代、ポロックは兄たちと一緒にこれらの遺跡をいくつも探検しています。上記の 1944 年のアンケートの中でポロックは、「私がかねがね、アメリカンインディアン美術の造形的質には非常に感銘を受けてきた。インディアンは適切なイメージを手に入れるその能力において、また絵画的主題を構成するものについてのその理解力において、真の画家のアプローチを持っている。彼らの色彩は本質的に西部のものだが、彼らのヴィジョンは、あらゆる真正の芸術が有する根本的な普遍性を持っている」とも言っていますが、すでに少年時代にポロックは、こんなふうに関先住民文化に深く接触していたのです。





▲ 制作中のジャクソン・ポロック、1950年

Photograph by Hans Namuth © Hans Namuth Ltd.

アリゾナ州北東部にはアメリカ先住民・ナバホ族の指定居住地が大きく広がっています。ナバホ族といえば砂絵がよく知られていますが、色砂を指の先から流し落として地面に絵を描いていくその独特な制作の仕方は、ポロックに大きな影響を与えました。

ただし、ナバホの砂絵は本来、純粋な芸術作品として制作されるものではありません。それは、病人の治癒のための儀式の一環として祈禱師(シャーマン)によって制作され、最後には跡形もなくすべて消されてしまうものです。

あるポロックの伝記の作者によると、ポロックは少年時代、先住民の居住地で砂絵の制作を何度か見たことが

あるそうです。しかしながら、これには懐疑的な向きもあります。というのは、ナバホの砂絵の儀式は、デモンストレーション等でなければ、原則的には関係者以外立ち入り禁止の秘儀だからです。秘儀だから少年時代のポロックが砂絵の儀式を見たはずがない、と単純に言うこともまたできないのですが、ともかく、私が2004年にナバホの指定居住地を訪ねた際、本物の砂絵の儀式を見たいと、出会った何人かのナバホ族の人にツテもなく聞いて回ったところ、やはり「秘儀だから無理」とのことでした。



▲ アリゾナで買ったお土産品の砂絵

しかたがないので、砂絵の儀式のデモ DVD と、お土産用のアート作品としての砂絵を買ってアリゾナをあとにした次第です。いつか本物の砂絵の儀式を体験してみたいと今でも思っています。

(T.O.)